月と太陽の行方

クロネコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
月と太陽の行方

【Ｎコード】
Ｎ１６１１Ｔ

【作者名】
クロネコ

【あらすじ】
とある国に　狂った王がいた。その王は、ただ　１人だけを待ち続ける。その待ち人が、来てくれるのなら　何でもやってのけた。それ故に　国は、荒れ果てていく。そして　やっと　待ち人は、現れて・・・？

前編

王は、待っていた。
たった　1人　王座の上で……。
周りには、自分を守ってくれるはずの　臣下達の姿は、どこにもいない。
それは、自分が　見放されたことを意味している。
幼い頃から　自分の側にいた者達も、みんな　この場にいない。
なぜなら　全員　自分を見捨て　自分以外の者に　忠誠を誓ってしまったのだ。
おそらく　自分なんかよりも　良い王の器を持っているだろう。
今までは、心からの忠誠心からではなく　恐怖で従っていただけなのだろうから。
彼は、半分だけだが　自分と血を分けた　存在。
狂う要素は、あるかもしれないが　支える者が、ちゃんと　近くにいるそうだから　問題ないはず。
正当なる　王妃の嫡子……生まれる前から　世界からも守られた聖なる王。
かつて　滅びた　国の奴隷を母を持つ　自分よりも、王族らしい王族だ。
自分よりも、幼いのに　国の行く末を見つめることの出来る　王たる王。

だが　王は、そんな事　どうでも良かった。
彼が待っているのは、ただ　1人なのだから……。
唯一　自分の心を掻き乱した　ただ　1人だけの存在。
闇の中にいた　自分を、照らしてくれた　光……。

心を呼び戻す　キッカケを与えてくれた　救い手だ。
それは、辛い記憶もあったが　失っていた時よりも　今の方が、ずっと　人間らしくなれたはず。
感情は、国を殺すかもしれないけれど　心を持たない　人形の時より　良いに決まっている。
なのに　人々は、それを許してはくれない。
苦しいのに　それを、苦しいと　言えないままがいいだなんて　嫌だった。
だから　王は、自身が　闇になることにする。
そうすれば　光が、再び　姿を現すから……。

その者だけが、自分を止めてくれるだろう。
自分を、唯一　殺してくれる。
王にとっては、最高の存在だ。
ずっと　その存在を待ち続けている。
世界を、自分から救ってくれる　唯一の救世主が訪れることを……。

アナタが、目の前に現れてくれるのならば　自分は、どんな残虐でも行ってみせる。
それは、最後　あの人と別れた時に　交わした　約束だから。
だから　王は、国を壊し始めたのだ。
自分の目の前に　あの人が、訪れてくれるように……。
最初は、彼女を守るだけだったけれど　それは、壊す事と同じことだった。
だったら　思う存分　壊してしまえばいい。
古くから伝わる　物語で　孤独な王が、最期に最愛の人と再会できたように……。
自分も、最期の時　彼女の手で果てたい。
それだけが、王にとっての目的となっていく。
臣下達は、そんな自分の様子に　恐れを抱き　去っていった。

中には、自分のしてきた行いを　王の名目として　行ってきた者いたが……。
それが、どうしたと　言うのだろう？
今まで　王は、王としてしか存在することしか許されず　自分を理解することさえ　許されなかった。
周りの人々は、自分を都合の良い　人形としか　思っていなかったのだろう。
だから　最終的な決定権でしか　意見を求めず　実行してきたのだから。
世界は、それ故に　荒んでいく。
人々は、欲望を充たす為　好き勝手にする。
強い者が、弱い者を陥れるのだ。
本来　王の器を持つ者は、世界が危機に瀕した時　打開の手段を見つけなければならなかった。
けれど　王は、それを行わない。
王は、世界の行く末など　どうでも良かったからだ。
最初から　自分の意思で　立っている　場所では、ないのだから……。

ただ　微笑むだけの国の主としてだけの人形……。
何の感情も持たない　機械のような存在。
最初は、幼い子供だから　誰も、その異変に気が付かなかったのかもしれない。
けれど　時が経つに連れて　人々は、心のどこかで　違和感を感じるようになったのだろう。
口には、出さなかったが　次第に　王を避ける者が出てきたのだから。
それを最初に指摘したのが、当時　両親の保護下にある年齢だった

王の待ち人の少女だ。
けれど　この頃は、誰も感じ取っていなかったことなので　その人物を危険視するようになってしまった。
王自身も、人形であったが故に　自分の意思を持ってはいなかったので　臣下達の言葉に従うしかない。
しかも　彼女は、この世界では滅多に見ない　不思議な外見をしていたこともあり　常に監視をつけられていたのだ。
けれど　彼女は、そんなに弱い存在ではなかった。
限られた自由しか　なかったのに　彼女がいる空間は、全く　別の場所であるかのように　花が咲き誇っているようだったのだから。
幼く　世界のことを理解していなかったが　彼女は、すぐに自分の置かれた　状況を受け入れてしまったのだ。
城にご機嫌伺いにやってくる貴族やその娘や息子達は、彼女を奴隷と　呼び　見下していたが　　あの子は、気にもしていなかった。
これは、拍子抜けだったが　彼女が、笑みを浮かべば　どんな邪悪な場所も、清浄なる　空間に変えてしまう。
けれど　別れは、やってきた。
彼女は、自らの意思で　城を出る覚悟を決めてしまったのだ。
王は、彼女を手放したくなかったけれど　何も言えばいいのか　わからなかった。

『　　……もしも　アナタが狂ったら　止めてあげる。今は、まだ　わからないかもしれないけど　それが、ワタシがこの世界にやって来た　理由なのなら　そうするよ。
　だから　立派な王様になって？今は、誰かに言われるままかもしれないけど　自分の心を取り戻して・・・さ？』
彼女は、微笑を残して　去っていった。

王は、なぜだか　彼女が城を去ってから　不思議な痛みを覚えるようになる。
それは、遠い昔　忘れてしまったような痛みだ。
大切な人達は、自分が　王になる　代償として　消えてしまった。
本当は、彼らと一緒に　消えたかったのに　　それは、許されなかったのだ。
自分は、唯一の王族だから　死ぬことも許されない。
これが、生きている　と　言えるのだろうか？
今になって　王は、過去を思い出す。
楽しかった　日々……。
年の近い　子供達と遊びまわった　あの場所……。
本来ならば　誰も知らず　平穏な日々を送るはずだった。
けれど　それは、突然の嵐とも呼ぶべき　訪問者によって　壊されたのだ。
返るべき場所は、もう　世界のどこにも存在していない。
王の居場所は、王座だけだから　と　消されてしまったのだから。
心の拠りどころも、世界のことだけだから　と　存在自体　なくなったのだ。
城の中でも　自分が、少しでも心を開こうとすれば　相手は、いつの間にか　最初から　存在していなかったかのように　いなくなってしまう。
だから　誰も、信じられなくなった。
それなのに……どうしてなのだろうか？

王は、過去を夢に見るようになったことで　少しずつ　心を思い出す。
けれど　それは、ずっと　押し込められていたことで　歪んでしまったのかもしれない。
欲望は、欲望を生んで　更なる　欲望を求めてしまうのだから。
彼女を求める気持ちが、暴走していく。

だから　やっと　手に入れた　唯一の存在だけは、失いたくなかった。
それなのに　誰もが、それを阻止しようとする。
何度も　探し出そうとしたのに　王の責任を押し付けて　実行させてくれなかった。
だから　あの時　お前達が、奪っていったように　壊してやったのに……。
自分達は、それを正当化していたのに　なぜ　許そうとしない？
それは、勝手すぎるじゃないか……。
ボクは、ただ　月（自分）を照らしてくれる　太陽（彼女）を求めているだけなのに……。

後編

「やっと　来たか」

王は、ゆっくりと　顔を上げた。
その視線の先には、1人の女が　立っている。
彼女の周りには、まるで　忠実なる　僕になったかのように　かつての臣下達が、固めていた。
幼い頃の面影が、少しだけ　残っている。
小麦色の健康的な肌の色に　闇のような漆黒の髪と黒い瞳。
この世界では、畏怖の対象になっている　黒を纏う者。
衣服は、貴族のように煌びやかではないが　その質素な灰色ワンピース姿は、彼女のスラリとした　手足を、強調しているようだ。
手には、護身用なのだろう　短剣が、握られている。
それには、見覚えがあった。
ああ　そうだ……アレは、彼女が　城にいた頃から　お守りとして　ずっと　持っていたものだ。
詳しくは、聞いたことがなかったけれど　この世界に訪れた時　唯一　持っていたものらしい。
短剣には、古の呪(まじな)いが、施されているようだから　何か　彼女が持つに当たって　意味が、あるのだろう。
もしかしたら　自分を倒す為のアイテムなのかもしれない。

「王……アナタは、本当に　変わったのね？」

最後に聞いた声は、可愛らしくて鈴がなっているようだったけれど

今の君は、もっと　魅力的だ。
けれど　ずっと　聞きたかった　その声は、なぜだか　震えている。
彼女は、今にも　泣き出しそうな顔をしていた。
王は、そんな彼女の顔を見たいだけではなかったのだ。
けれど　そうさせてしまっているのは、他でもない　自分なのだ。

「もう　名前も、呼んでくれないの？
ボクは、ずっと　君だけを求めていたのに……。
やっと　君は、ボクの元に戻ってきてくれたんだね？

あの頃は、ボクの本当の言葉を君に伝えることは出来なかった。
でも　今は……」

王の声に　女は、ピクリと　肩を震わせる。
なぜか　とても　悲しげな顔をしているようだ。
理由は、わからないけれど　何か　彼女に誤解があるのかもしれない。
お願いだから　そんな　顔をしないで？
ボクが求めているのは、そんな顔じゃなくて……。

「それは、ただの欲望の捌け口として……？
だとしたら　ワタシは、誰のものにもならないわ」

凛とした声に　王だけでなく　皆が、彼女を見つめていた。
王宮を出た後　彼女が、どんな生活を送っていたのか　知らない。
けれど　それは、創造できないような辛い事だったのだろう。
そう考えると　悲しくなってきた。

「確かに　ワタシは、この国で何の身分も持たない　奴隷……。
いいえ……それ以下かもね？

だって　この世界のどこにも　出生証明書が、存在していないんだし。
でも　こんな　ワタシにだって　心は、あるの。
どんなに蔑まされても　生きたいと　思うから　今まで　やってこれた。

今　この場にいるのだって　誰かに言われたからじゃないわ？
ワタシは、別に　この世界の救世主を名乗るつもりなんかないのよ？
ただ　約束を果たしにきただけなんだもの」

彼女は、真剣な顔で　ボクを見つめている。
その視線を　逸らすことは、出来ない。

「うん……待っていたんだ　君だけを。
君が、城を去ってから　ボクは、昔の夢を見るようになった。
よく　わからなかったけれど　ここが、すっごく　痛くて仕方がなかったんだ」

ボクは、そう言って　胸の辺りを摩った。
その仕草を見て　彼女は、目を細める。

「何度も　君を探そうとした。
でも　その度に　みんなが、邪魔をしてきたんだ。
それだけじゃない。
君の事を　殺すよう　刺客を送ろうともした。
ボクは、絶対　駄目だと言ったんだ。

だから　君を殺そうとするなら　彼らの家族を殺すと言った。
それなのに　彼らは、それを聴こうとしなかったんだよ。

ボクは、忠告したのに　聞いてくれなかった。
母上達の時は、それさえもせず　攻撃してきたから　そうならないように　警告したのに……」

そう　彼らは、ボクの言葉を無視して　実行に移そうとしてしまった。
結局　刺客に選ばれたのが、以前の知り合いだったこともあって
それには、至らなかったのだが……。
だが　命令を無視した償いとして　彼らの家族は、処刑したんだ。
勿論　女・子供も、関係なく……。
約束を破ったのは、彼らなのだから　仕方がない。
それなのに　彼らは、止めようとしなかった。
更に　行動を大きくしてしまって……。

「アナタは、自分の意思を伝える　表現の仕方を間違ってしまったのね？
心を失っていたから　それが、爆発して　暴走してしまったんだわ。
だけど　アナタのしたことは、赦されるべきことじゃない」

彼女は、短剣を持つ　手に　力を入れた。

「世界が　ワタシをこの世界へ呼んだ理由を、今　ここで果たす。
我が相手が、狂いし時　我が想いを込め　その呪いを討ち滅ぼすッ！」

短剣は、そのまま　彼女の手を離れ　王座に座る　王の元へと吸い込まれるように　飛んでいく。
その光景に　一同は、息を呑んだ。

誰もが、言葉を発しない。
王も、それを受け入れるかのようにして　動こうとはしなかった。
最初から　覚悟していたかのように……。
短剣は、勢いよく　王の胸に突き刺さる。
そして　次の瞬間　王の周りは、白い光に包まれた。
皆は、その光景に　驚きを隠せない。
ただ　女だけは、その光の中に飛び込んだ。

「何で……？」

ボクは、それだけしか　言葉が見つからなかった。
彼女は、その問いかけに　苦笑する。

「言ったでしょう？
ワタシは、アナタを止めに来た　と　。
だけど　1人にさせるとは、言わなかったはずよ？」

その笑顔は、ずっと　見たかったものだ。
太陽のように周りを、明るくしてくれる　温かみのある　微笑み。

「ずっと　アナタに逢いたかった。
だけど　それは、許されない事だと思っていたの。
お城にいた頃　ビシビシ　色んな視線を受けていたしね？
それに　この世界にやってきた時　神サマに言われた言葉を思い出してしまって……逢っちゃいけない　って思っていたから。
だって　逢う時は……」

彼女は、肩を竦めながら　言う。

「だから　風の噂で　アナタが、正気を失い始めたと聞いて　気が気じゃなかった。
このままだと　ワタシは、アナタを殺さなければならない　と　思ったから」

ボクは、それを聞いて　彼女を抱きしめる。

「最初から　ボクは、君の手で止められることを望んでいたんだよ？
だから　こんなにも嬉しいことは、ないんだ。
まさか　君まで　一緒に来るとは、思わなかったけれど……」
「いいのよ　そんな事。
元々　この世界にとって　ワタシは、アナタを止めるだけの存在なんだもの。
利用する為だけに　あの人達は、甘い言葉を投げかけてきただけ。
本心は、見下しているだけなの。
ワタシは、アナタと一緒にいれるのなら　どこにでも　付いて行くわ？」

その言葉は、心に染みてくる。
気が付けば　頬を、涙が伝っていた。
彼女は、それに気が付いて　満面の笑みを浮かべる。
「最初に言葉を交わした時の内容を覚えている？
ワタシは、アナタの太陽になってあげるって……」
「ああ　覚えているよ。
君が、ボクを照らしてくれるんだろう？」

2人は、お互いをしっかり　と　抱きしめて　光の中に溶け込んでいった。

光が消え　その場には、倒れこんだ　男女が、姿を現す。
２人は、お互いの手を握り締め　幸せそうに微笑んでいた。

後日談（前書き）

完結です。

後日談

とある　大広間では、大きな椅子に座る　青年と数人の軍服や女官服に身を包んだ　若者と年老いた　貴族達が、テーブルを囲んで　何かを話し合っていた。
そこへ　若い騎士達が、雪崩込んでくる。

「お前達……礼儀を弁えるべきではないかッ！
これだから　平民上がりは……ッ！」

小太りな貴族の1人が、呆れたように　騎士達に怒鳴った。
けれど　青年は、それを　手で制す。

「ご報告いたしますッ！
先程　王が、あの女に討たれました。
女も、その後を追って……」

その報告に　室内は、ざわめき出す。
特に　貴族達は、感激しているらしい。

「これで……やっと　国が、平和になりますな？」
「本当ですのう？
まさか　あれ程にまで　暴走するとは、思いませんでした」

だが　若者達は、険しい顔だ。

「そうか……あの2人は……。
兄は、抵抗したのか？」

青年は、悲しげな表情を浮かべていた。

「いえ……まるで　あの女性を待っていたかのように　王座に腰を下ろしておられました。
短剣が、投げられました時も　逃げることもなく……」

その話に　青年は、黙り込んだ。

「陛下……あの2人の遺体は、どう致しましょうか。
今は、別室に安置しておりますが……」

その声に　青年は、その場にいる　皆を見た。
室内は、一瞬にして　静寂に包まれる。

「国葬だ。
異論は、聞くつもりない。
国を挙げて　2人の冥福を祈る」

その発言に　貴族達は、再び　ざわめき出す。

「な……何を言われるのですか？！
あの男は、国を荒らした……張本人ですぞ？
しかも　あの女も……元を正せば……」

その声に　青年は、その発言をした　太った貴族を睨む。

「元を正せば　あの2人の運命を狂わせたのは、僕の存在だ」

その声色は、悲壮が　篭っている。

「平穏な生活を送るはずだったのに　僕の存在を呪いから守る為
無理やり……。
万が一　支える者と出会っては、全てが台無しになってしまうから
　兄と深い関わりを持つ者は、全て　存在を消された。
呪いの効果が、長く　兄を蝕み　僕の存在を察知する余裕もないよ
うに」

青年の言葉に　皆は、何も答えない。

「僕は、ずっと　何も知らなかった。
みんな　何も教えてもくれなかったじゃないかッ！
そして　成人する年齢になって　　聞かされたのが、僕の出生だっ
た！
最初は、兄のことを悪く聞かされたけれど　真実は、違っている」
「ですが……あの方の所業のせいで　民は、苦しんだのですぞ？
王たるものは、民の為　尽力を注がなければなりませんのに……」

「兄が、行った　政(まつりごと)は、全て　重鎮の貴族達が、前もって　話し合
った事を、最終決定を下しているだけだったのでしょう？
それなのに　全ての行いを　兄が元凶だと決め付けるのは、間違っ
ているッ！
全て　話は、聞いているのだから」

その言葉に　逃げるようにして　この青年の元に集った　貴族達は、
震え上がった。

「兄の名を使って　相当な金を使い込んでいたらしいじゃないか。

しかも　後宮の女性達は、ほとんど　アナタ方の妾だった　と　伺っていますよ？
王の名を使って　無理やり　後宮に連れてきたのでしょう？
全員　国庫の金を使っていたそうですし」

それを聞いて　貴族達は、目を大きく見開き　青年の臣下達は、遠巻きに　呆れ果てている。
皆の視線に　彼らは、肩を竦めてしまっているようだ。
最初は、身代わりの王の監視役だった。
だが　少しだけ　少しだけと思っているうちに　欲が、芽生えてしまったのだろう。
この事は、内情に知るに当たって　兄の側近として　近くにいた者達から聞いていたのだ。

「では、決まりだね？
兄上達は、国葬する。
勿論　全ての事実も、民に伝えるつもりだ」

それに対して　貴族達は、反論の声を上げようとするも　青年や他の者達の睨みに　黙り込む。

「民には、真実を知る　権利がある。
偽りではなく　事実をだ。
それに　兄の所業の中には、民の為に尽力したこともあるのだから……」

願うように　呟くと　年の近い　側近達は、頷いてくれる。
そんな彼らの反応を見て　青年は、嬉しそうに　微笑んだ。

「じゃあ　話は、これで終わりだね？

僕は、兄上に最後の別れをしたい。
まぁ　僕も、一度も会ったことがなかったんだけど。
みんなが、知らせてくれることで　近くにいたように感じていただけでね？」

青年微笑んでいると　　また　部屋の中に　1人の騎士が、雪崩れ込んできた。
もう　誰も、最初のように　怒鳴り散らす貴族は、いない。
けれど　彼は、顔を真っ青にさせてしまっているようだ。

「た……たい……大変ですッ！
お……王とじょ……女性の……い……遺体が…突然　……消えました……ッ！」

その叫び声に　皆は、驚きを隠せない。
まるで　煙のように　消えてしまうことなど　ありえない事なのだから。
けれど　その後　捜索をしたにも拘らず　2人の姿を発見することは、出来なかった。

「一体　どうなっているんだ？
なぜ……2人が……」

戸惑いを隠せない　青年に　側近達も、顔を見合わせるばかりだ。
貴族達は、何かの呪いだと　騒ぎ始め　逃げるように　他国へと亡命していったそうだ。
結局は、そんな話を誰も受け入れず　この国を裏切った　制裁として　処刑されたらしい。
同盟国には、事前に　全てを語っていたことが、それに繋がったの

だろう。

その後　国の王には、青年が就いた。
王は、全ての事実を　包み隠すことなく　民に知らせたそうだ。
人々は、それを聞き　驚きを隠せなかったらしい。
それもそうだろう。
けれど　若い王の深い悲しむ姿を見て　共に　その２人の冥福を祈る。
たとえ　２人の身体が、消えてしまっても　その魂は、どこかの世界に存在しているんだから……。

青年王は、時が経ち　伴侶を迎えた。
その女性は、まだ　少女のように幼く　平民の出だったが　それは
　それは　国のことに尽力を注いだらしい。
彼女は、生まれた時から　青年と結ばれることが、義務付けられていたかのように　生涯　王を支え続けたそうだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1611t/

月と太陽の行方

2011年8月9日12時27分発行